

ごん吉くんしポート〜南吉もやま話〜

第25回

南吉を魅了した月

新美南吉の命日「貝殻忌」を2日後にひかえた3月20日、半田空の科学館のプラネタリウムホールで「貝殻忌朗読コンサート」星空の下、南吉さんと共に「」を開催しました。星にちなんだ南吉作品の朗読にあわせて、ピアノとチェロの演奏を楽しみながら、74年前に亡くなった南吉を偲びました。

夜空に輝く星は、数多ありますが、私たちにとって最も親しみ深いのは、地球から一番近い星「月」でしょう。

月は、洋の東西を問わず昔から文学の題材になってきました。太古の神話に始まり、万葉集、竹取物語など日本の古典にも多く登場します。南吉が憧れた作家アンデルセンは、月が語る話を貧しい画家が書き留めたという形で連作短編集「絵のない絵本」を書いていきます。

南吉も創作を始めたばかりの若い頃から、好んで月を題材に

詩や童謡を書きました。中学から東京外語までの学生時代に雑誌などへ発表した46編のうち、実に3分の1の15編に月が登場します。中には、「月から来た人／＼」にいます。／＼からナイフをぬいている。「（月から）第3連）のようにSF的な童謡もあり、「赤い鳥」誌上で、北原白秋から「鋭い」「とりあわせに個性があつてよい」と褒められています。

童話にも印象的な月夜の場面が多く登場します。「ごん狐」で、お念仏に出かける兵十と加助の後を「ごん」がついて歩くのは、夜道に影法師が映るような「月のいい晩」でした。「手袋を買いに」では月光が照らした雪に「コバルトの影」がたまります。

また、「和太郎さんと牛」で酔いつぶれた和太郎が牛車に乗ったまま失踪するのも、「ねしずま」のき村と盗人たちで盗人の頭

がどこの誰かわからない子どもから仔牛を預けられた日も、夕刻には「かがみ職人の磨いたばかりの鏡」のような月が空に光っていました。そんな幻想的な月夜には不思議なことが起こります。和太郎は長年ほしかった赤ん坊を授かり、盗人の頭はこれまでの生き方を悔い改心します。夜空に美しく輝き、自らの満ち欠けで死と再生を繰り返しながら、地球の潮の干満も支配する月には、私たち人間を魅了する不思議な力があるのかもしれない。



提供：半田空の科学館



民生委員制度創設100周年記念 植樹 及び 記念碑除幕式

民生委員制度創設100周年を記念して、5月12日の「民生委員の日」に半田市民生委員児童委員協議会長、半田市社会福祉協議会長、市長が出席して、記念植樹及び記念碑の除幕式を執り行いました。

植樹された樹木は「ハナミズキ」で、設置された記念碑の表面には制度創設100周年を記念する旨が、裏面には半田市民生委員児童委員協議会の名前が刻印されています。

【問合わせ】生活援護課 ☎84-0655

